

本と社会

「人文ネットワーク」ニュースレター
2003年6月20日 第4号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集室内 (担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832
E-mail: shrn@eagle.ocn.ne.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々と連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性の中に腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的な生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニュースレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

巻頭インタビュー

『地球文明の未来学』(w.ザックス著)
訳者・川村久美子氏に聞く

議論と実践の書



川村久美子氏 (武蔵工業大学環境情報学部)

体とした経済を構築することで、利便性を維持しながら資源使用量を落とすことができます。個人のちょっとした我慢が大きな結果につながります。もちろん企業だけではそうしたシステムの開発や普及は難しく、利用者や行政の積極的参画が必要になります。こうして個人の努力がそれに共鳴するシステムに出会い増幅したときに文明は変わるでしょう。

れには強い情緒的反応が伴います。肯定的であったり否定的であったり、否定を通り越して拒絶的であったりと読者の反応も様々です。驚くべきは、その後に必ずといってよいほど議論が巻き起こることです。良書とは著者と読者、読者どうしの対話を生み出すものではないでしょうか。

❖w.ザックスの手法は、現代文明の在り方と私たち個人の在り方を同一線上で捉えようとするものですが、その議論のポイント、焦点はどのように設定されているのですか？

川村 地球生態系は危機的状況にあります。ザックスはその原因を近代文明の在り方(モノの豊かさこそ幸福の源泉と信じ、経済成長を目指して邁進し続けること)に求めています。だからこそ彼は、文明の抜本的な改革が必要だということです。先進国の環境政策は資源効率を高める環境技術の開発ばかりに眼を向けている点で不十分です。ザックスはさらに、物質文明の改革に必要なのは個人の生活の見直しだと述べています。私たち一人一人が、限られたモノから最大限の幸福を生み出す能力を回復し、日常実践を通してその土地、その土地にあった「ほどほどにいい生活」を再建することが大切だと言います。そうした努力の集積が惑星大の問題を解決するだろうと考えているわけです。

❖個々人の努力で文明が変わるのですか？

川村 資源消費量90%削減が目標ですが、モノやエネルギーの利用を十分の一に切り詰めた耐乏生活を送れというのでは誰一人ついてこないでしょう。要は、個々人の努力に加えて、努力の結果に結びつけるシステムを作ることです。たとえば製品販売に代えてサービス販売(リース・レンタル・共同所有)を主

❖ザックスの議論には賛否両論がありますが、むしろ議論を深めることの重要性を彼は説いています。その意味は？

川村 ザックスは、文化の多様性の維持こそ大切だとしています。それは物質文明と強く結びついた西洋製の普遍主義が世界に蔓延するなかで、物質文明の価値に染まらない文化にこそ文明再生の知恵があると考えます。それは生物多様性が人類にとって可能性の宝庫であると同様です。西洋思想は「普遍性」を語ることで議論自体を封じ込めてきたところがあります。多様な文化的視点を尊重し、議論を尽くして意見の調整を図ることは、今後これまでに重要になるはずだと

❖本書に対する読者の反応はいかがですか？

川村 読者は一様にある種のショックを受けるようです。本書は「北」による自己分析、自己批判の著ともいえるわけですが、自分の姿は自分ではなかなか見えないものです。私自身、本書を読んで開眼の思いがしました。これまで何気なく繰り返してきた日々の生活、何の疑問も抱かずに持ち続けた価値観について再考せざるをえなくなりました。当然、そ

❖ところで、研究者としての川村先生の使命は？

川村 環境分野の研究に手を染めるようになってわかったことですが、今では専門という棲み分けは以前ほど厳密あるいは重要ではありません。自然科学、社会科学、人文科学を横断して議論を展開しなければ環境問題など端から捉えることはできません。研究者は専門領域を越えて関心を広げ、必要とあらば専門外の議論にも踏み込んでいく必要があります。研究者はさらに学界という閉鎖空間に安住するのではなく、企業や行政、市民とも強く連携する必要があります。そうした新たな研究者像をザックスが体現しています。研究対象の社会や自然を外側から客観的に観察し、客観的な知識を打ち立てていけばよいというものではないと思います。

(インタビュー/文責:新評論編集部、'03.5.6)

▼訳者から読者へのメッセージ

「幸福とは何か」をい一度問い直すと、それがいかに大切かをザックスは説いています。本書によって、新しい議論が生まれることを心から期待しています。

川村久美子

『地球文明の未来学—脱開発へのシナリオと私たちの実践』w.ザックス/川村久美子・村井章子 訳

効率から充足へ。開発神話に基づくハイテク環境保全を鋭く批判し、先進国の消費活動自体を問い直す社会的創造力へ向けた文明変革の書。A5上製・324頁・税込3360円・新評論刊

2003年4月19日、早稲田大学総研分室において、訳者の川村久美子氏をはじめ、竹中宏子（お茶の水女子大学大学院人間文化研究所）、桑田禮彰、土屋進、白石嘉治、出口雅敏が参集。議論は、新植民地的関係の見直しから、制度のデザインと個人のライフスタイル、あるいは日常的抵抗の可能性にまで及んだ。以下、各人の発言の要旨を記す。（編集／出口）

○北と南、西欧と非西欧の関係の見直し

竹中 今日までの西欧と非西欧、北と南の新植民地的関係の検証・反省の書として、ザックスのこの本は示唆に富んでいます。私たち人類の社会発展の道のりが一つではないこと、いくつもの道があり、その複数の可能性を模索してゆく作業の大切さが、説得的に議論されているからです。ただし、ザックスは自覚的だと思われませんが、こうした模索的作業の多くが依然として、西欧の側や北側から提出されている状況を私たちがどう受け止めるかについては、さらに議論の継続が必要です。

またザックスの提案の一つに、地域単位での政治経済的・文化的な枠組み作りがありますが、今日のグローバリゼーション下で浮上した「地域」や「ローカル」といった概念をどう把握してゆくか？議論の余地も残ります。

○地域主義、多文化主義、消費社会の二面性

出口 ザックスの提案の一つに、地域や文化の多様性の回復があります。しかしそれは、従来の地域主義的、多文化主義的な社会像とどう異なるのでしょうか？すでに、これらの社会像についての批判もあり、今日において、いまだ留保付き提案に留まります。地域や文化の多様性の回復に託された肯定的側面と同時に、その否定的側面をも視野に入れた議論を継続することで、ザックスの提案を、より説得力を持つ提案に作り変えられるはずです。

また、本書のような議論が、私たちの社会でどのように受容されるかについても、問題化してゆく必要があります。私たちの高度な消費社会では、ザックスの提案する「シンプル・ライフ」さえ商品化されてしまう懸念があるからです。

『本書の議論をより深めるために』

……人文・社会科学と自然科学をつなぐ本……

- 『瞬間の君臨—リアルタイム世界の構造と人間社会の行方』（ポール・ヴィリオリオ著 土屋進訳 新評論 '03 2520円）仮想空間が実体化する物理的根拠に迫り、「新しい知覚空間」への権力の介入や現代人の肉体および意識の変容を鋭く捉えた最先端の思想書。
- 『科学は今どうなっているの？』（池内了著 晶文社 '01 2310円）原子力事故など20世紀最後の10年間の事件・事故を取り上げ、最先端科学のあり

○新自由主義批判と日常的抵抗

白石 本書でザックスが追跡した戦後の開発問題は、別の視点からすれば、とりわけ75年以降の新自由主義の台頭と、その地球規模での浸透という文脈からも検討できます。新自由主義の今日的帰結とは何か？それは、国際政治的次元のみならず国内政治的次元までも、つまり私たちの日常生活においても、管理・取締まりが強化されている、という事態です。

こうした趨勢において、私たちの日常的ふるまいをどう組み立て直せばよいのでしょうか。ネグリ／ハート『『帝国』』に引かれた聖フランチェスコの清貧なる生活とその喜び、ザックスが称えるソロー「森の生活」に示された簡素さや無垢さ、また、ルフェーブルの展開した日常生活批判などを手がかりに、私たちは管理と排除に対する日常的抵抗を模索する必要があります。

○交易システムと欲望

土屋 交易システムは、常に人間の生存を可能としてきました。ところが今日の支配的な交易システムは、一部の人間の生存のために他の人間の生存が脅かされる、という事態を引き起こしています。



座談会の模様

端的に言って、このシステムの内では、情報や差異（利潤）への人間の欲望が、モノの流通を生み出していると言えます。しかしだからと言って、その欲望を否定したり、個人の意識だけでこの欲望を制御できるのか、疑問は残ります。今日の支配的な交易システムの力強さが、一体何に由来しているのか、私

かたを問う時評集。

- 『暴走する世界—グローバリゼーションは何をどう変えるのか』（アンソニー・ギデンズ著 佐和隆光訳 ダイアモンド社 '01 1575円）グローバル化する科学技術は人類の制御範囲をかえって狭める。現代社会を脅かす未曾有のリスク、伝統、家族、民主主義の変容について語る問題提起の著。
- 『危険社会』（ウルヒ・ベック著 東康・伊藤美登里訳 法政大学出版局 '98 5040円）科学と産業が否応なく生み出すリスクの分配が主要関心となる社会—危険社会について書かれた名著。

たちはさらに見定める必要があります。

ところでグローバルとは本来、関係のシステムを指すのであり、ローカルの解体とは違っています。個々のローカルなシステムが相対的に自律し、相互依存し合う状態を言うのです。



1972年12月7日、アポロ17号が月から撮影した「青い地球」。© NASA

○個人と倫理

桑田 環境問題のような客観的な問題と、私たち個人の心の問題を、日常生活において、どんな風に結びつけて考えられるかが問われていると思います。私の場合それは、倫理的に生きてゆく、ということです。倫理とは内なる生き方です。すなわち一人の個人が、日常生活の中で取る一つ一つの行動や選択について、それが次にどのように連鎖してゆき、そして帰結するのか、ということを論理的に予想・判断しながら生活してゆく、という個人のライフスタイルです。ただし、危険なのは倫理が道徳化することです。なぜなら本来、内にはなく、外に対して発せられる道徳は、科学や論理的思考を排除してしまうからです。

○制度のデザインと参加のデザイン

川村 もちろん個人の内面や責任に訴えることも大事です。しかし脱開発や環境をめぐる問題を、私たちの社会の制度やシステムの問題として考えてゆくことも、同様に重要です。

また、科学者や研究者の果たす社会的役割や活動範囲についても検討を要します。私自身は、学会という狭いコミュニティを越えて、行政や企業、市民団体との対話を日常的な議論の場として活動してきました。というのも、これまで、科学者や研究者が独占・生産してきた知識を、社会の他の場所で活動している人々の参加や対話を通じて形成してゆくことは、重要だからです。そのための対話・参加のデザインをいかに作るかが今後の課題です。

座談会を終えて 科学者や研究者といった「専門家」と、「素人」との関係についての川村氏の問いが、私には印象的であった。近年の科学論では、「科学の公衆的理解」(PUS: Public Understanding of Science) という問題系でも論じられている(井山・金森『現代科学論』新曜社、'00)。専門家と素人の知識勾配を前提にして、どのような関係が形成できるのか？ また、専門家の知識とは異なる素人独自の知識への評価や、両者の関係が問われている。(出口)

非共存型論理の感性

●蔵持不三也(早稲田大学教員/歴史人類学)

おかしな物言いが流行っている。いや、流行らされている。曰く、グローバルゼーション、文明の衝突、持続可能な開発…。世界を語る言葉がつねに「先進国」の増上慢から作られるという事実を、まさに端的に示す事例といえるだろうが、そこに他者性の視座を見出すことは難しい。たとえば、明らかに持続可能な開発と対をなすグローバルゼーションの発想は、貧困のメカニズムに逼塞を余儀なくされている「途上国」の民衆にとって、いったいいかなる意味があるのか。また、9.11事件とは、あくまでもイスラム世界の一部「過激派」と、いつの間にか世界の警察を自称し、たえず敵を創り出すようになった米国との対立でしかない。むしろそれは文明の衝突などではさらさらなく、ありていこいえば「地球文明と米国との衝突」にほかならない。イラク戦争で世界に踏み絵を踏ませた帝国主義ないし米国的正義の論理は、こうして今、民主主義やヒューマンイズムといった、近代を構築してきた思想の文法を確実に変形させつつある。とすれば、われわれは未来から立ち上げていかなければならない。人類史の纂奪を許すものは何か、という重い問いを。

「シンプルな暮らし」とは何か？

●白石嘉治(上智大学他、教員/文学)

われわれは第三世界の「開発」に依存しているだけではない。注意すべきは、われわれ自身が「開発」の対象となっていることである。たとえば自己「開発」セミナー。人間はそこで「能力」という「ダイヤモンド」を埋蔵する「アフリカ」に喩えられる(矢部史郎/山の手録『無産大衆神髓』)。この例は極端だが、われわれは多少なりとも、自分を「資源」として差し出すように煽られているのではないか。ザックスの説く「シンプルな暮らし」とは、何よりもこうした「開発」のくびきからの離脱である。ソーローの自己充足的な「森の生活」がその例としてあげられているが、彼が『市民の反抗』(1849)の著者であることを忘れてはならない。ソーローは奴隷制や人頭税のみならず、資本に回収される労働そのものを斥けていた。したがって「シンプルな暮らし」自体、きわめて政治的な実践である。それは「開発」としての労働の拒否であるかぎりにおいて、ネグリ/ハートによる『『帝国』』の結語、「アッジの聖フランチェスコの伝説」が開示する「共産主義者であることの抑えがたい快活さと喜び」と響き合っているのである。

他者に出会える権利

●桑田禮彰(駒澤大学教員/哲学)

現代社会は、「自由の専制」という矛盾した様相を呈している。本来「自由」の定義は「反専制」だからである。逆に「平等」は、階層的な不平等の破壊により専制的な不平等を強化するかざりて、「専制」に向かいうる。近代の民主主義思想が「自由と平等」という二大原理を設定したとき、「自由」は、こうした「平等」に歯止めをかける役割を担った。その後、両者はどうなったか。優勢な「平等」は、階層的な不平等と一緒に社会的多様性を破壊することによって、専制を強化してきた。劣勢な「自由」は、「平等」による多様性の破壊をまのあたりにしながら、「不平等」を好む自らの貴族主義的傾向の最終的発露として、専制的な不平等を選んだように思える。反専制としての「自由」が、歯止めの役割を放棄すると同時に奴隷たることを拒否し、専制的支配者になるという構図である。そうである以上、私たちの実践は、「自由」の役割を復活させ、「自由」を「異なる他者に出会える権利」と再定義し、「平等」を「対等」に置き換えた上で、社会的多様性を二重の「不平等」(多様な階層的な不平等と均質な専制的な不平等) 解消のための地盤として明示する作業となる。既に多くの人々がそれに着手している。

日常的習慣

●出口雅敏(モンペリエ第3大学博士課程/文化人類学)

ある山村での調査の帰りのことだ。私のいるバス停の反対側で、老人が何種類もの色分けされた巨大なゴミ箱のあいだを行ったり来たりしながら、ゴミを分別している光景を目にした。その村は数年前からエコロジー・ヴィレッジを謳い、自然と調和したライフスタイルを掲げていた。だが、老人よりも巨大なそのゴミ箱たちは私には異様に見えた。そして彼らを前にして右往左往する老人の姿に、ゴミ分別に象徴される次代の社会制度を構想し、適応せねばならない今日の私たちの姿がダブった。疑問が連鎖した。提案された制度に対する彼の信頼は何に由来するのか？ コミュニティの中で、自分がクズだと分別されることを危惧してゴミ分別にいそんでいるだけなのか？ それとも、彼にとってはもはや信頼からでも危惧からでもない、日常的習慣の一つだということなのか？ 新たに構想される制度や村の掟は不完全な信頼や従順と共に始まるが、やがて習慣を通じて身体化・下意識化されてゆく。だがもし習慣を吟味する姿勢を怠らなければ、習慣は第二の知性に変わりうるはずだ。日常的習慣を思考の休止ではなく、思考の実践として味方につけるために。

状況雑感

エコロは資本主義をつぶせるか？ ●大野英士(早稲田大学他、教員/文学)

文化的には一層の鎖国と排外主義を強めつつ、新自由主義の主導する「グローバリズム」の波にはまんまと乗り遅れ、二重、三重の意味で「後衛」の位置に甘んずる我が日本の退廃は、日を追うにつれて、さらなる不毛な退行の一途をたどっているようにも見える。『『帝国』』のなかで、ネグリ/ハートは、時代遅れの「規律的な生産モデル」にしがみつく日本の資本の姿を笑い飛ばしているが、現在日本の社会で進行しているのは、正社員パートの待遇格差に象徴されるような、身分社会へのなしくずしの逆行であり、不合理的な解雇や労働強化のなかで「効率化」が口実としてもちだされる限り、下の人間は上の人間に人格を無視されたいかなる暴虐をも甘受せざるを得ないという「規律モデル」のさらなる強化だ。

経営再建途上にあるSデパートの経営トップが、各支店を巡回しつつ、家畜を叱咤するように並み居る幹部社員を怒鳴りつける。そしてそのさまを公共テレビが全国に流す。ヨーロッパなら企業イメージに決定的な破局をもたらしかねない暴虐が、この国では、優れた経営モデルの実例を示す美談なのだ！ なるほど人文書の売れ行きが落ちるはずだ！ 奴隷に料金は不要だから。

グローバル化した社会では、「生産的な主体性」(ネグリ/ハート)が生き残りの鍵を握る。生産的な主体を作るのは、自由な批判と議論を許す柔軟で寛容な社会だ。だが、本来、批判とは資本に都合のよい「建設的批判」ばかりでなく、資本主義そのものを侵食する反逆と叛乱を内包する。ザックスは、資本主義がこのままの行路を辿る限り、環境のカタストロフは避けられないという。ならば、エコロは企業に有利な環境ビジネスを提案するかわりに、資本主義をつぶす方途を構想すべきではないのか？

編集後記▶ 当会第11回例会は脱開発論の旗手として名高いW.ザックスの『地球文明の未来学』(原題 Planet Dialectics)を取り上げ、ザックスと親交の深い訳者、川村久美子氏をお招きしての読書会となる。まずはご多忙の折、長時間に渡りお付き合ひ頂いた氏に心から感謝申し上げます▶ 本書の議論の新鮮さは、近代文明の行方といった大状況と、地域・個人レベルで生起する小状況とを統一的かつ立体的に捉える手法にある。例会参加者にとっては、自らの等身大の位置(小状況)と世界認識(大状況)が同時に試される場となった▶ 当訳書の副題に「私たちの実践」という言葉を使った。近代をめぐる大きな議論を一旦振り出しに戻し、議論する主体の軸足を読者一人一人が明確にした上で、そこから再び大小の議論の方向を見定めていこうという気持が込められている▶ 「当事者性」が炙り出される真の議論の場が、今求められている。それはより深い他者への洞察を誘うものだ。当事者意識の欠けた議論の場は、単なる物知りになるための読書術を増産し、果ては自己にも他者にも決して触れることのない歪んだ遊戯的・政治的空間を増殖させるだけだろう。それはやめよう『地球文明の未来学』編集者]